

# 工場ドリーム

yamamomon

のんのんのん。のんのんのんのん。

午後の工場は、だるい音。日曜のパン工場は、いつもより少し静かだ。

まさるはごろんと床に転がって、白っぽい空をながめていた。

マンションの7階のリビング。転がって見上げれば、空と、工場の煙突だけ見える。ほのほのと白くあわい煙が、空を軽く流れていって、雲と混じる。

空中に浮かんだ船にのってるんだ、と考える。ゆらりゆらり、身体がゆれる。床がふらふら、天井もゆらゆら。

8月、夏休みだ。プールから帰った午後は、手足がだる一んとだるい。ときおり肌をなでてゆく風が、さらりとくすぐったくて、気持ちがいい。

世界じゅう、だる一んとだるい。工場のかすかな音が、まるで、誰かがへたっぴいなオルガンの練習をしているみたいに聞こえてくる。

のんのんのん。

リズムカルで、眠たくなるような、工場ミュージック。目をつぶれば、煙突から音符が流れてゆく様子が見える。雲の間をるりんりんと流れてゆく、街と空の音楽。

パンがつぎつぎ焼けていきながら、歌ってる歌だ。

たくさんパンが、こんがり、ふくふく、ふくらみながら、楽しそうに流れてゆく風景が目につかぶ。そうして、ほのかな甘いこうばしいおやつパンの匂い。はちみつバターのとろけるような、焼きたての匂いだ。

少しうとうと、目が覚めたら、おやつ時間だった。

「ばあちゃん。」

まさるは、畳にころがったまんま、隣の部屋で縫い物をしてるばあちゃんを呼んだ。

「ハラへったよう。きょうのおやつ、なあに？」

「金星パン工場の特製よもぎあんぱん。冷凍庫にラムネアイスもあるよ。」

「えーっ。また工場のパンかよー。昨日もおとついてもだったじゃんか。オレたまには、街の生クリームぽってりケーキとか、ばあちゃんの、ぷるぷるたまごプリン、食いてえなー。」

ばあちゃんは、まゆをつりあげる。

「ぜいたく言うんじゃないよ。昨日はクリームパン、おとついはメロンパン、ちゃんと違うメニューじゃないか。プリンも、こないだつくってやったばかりだろ。...大体、この金星パン工場のパンは、素晴らしくいいパンなんだ。ばあちゃんの友達が社長やってんだから、間違いないぞ。ばあちゃんも母ちゃんも父ちゃんもまさるも、ここのパン食べるからこんなに元気なんだぞ。文句言うたら、ばちあたるぞ。」

確かに、ここの工場のパンは、うまいんだ。結構有名な工場で、全国のスーパーやレストランから注文がいっぱい来るらしい。毎日、パンをぎっしりつめた大きなトラックが、全国の腹ペコめざして、ぐんぐん走ってゆく。

だけどなあ、とまさるは思うのだ。毎日毎朝、おやつまでじゃあ、ちょっとあきるよなあ。のそっと起き上がると、ふう、と、ため息ひとつ、よもぎあんぱんふたつつ、袋を破って、皿ののっけて、レンジでチン。

さすがに、ばあちゃんも、ちょっとあわれに思ったらしい。冷たい牛乳を片手に、あんぱんをもぐもぐやりながら、こう言った。

「まあなあ、しばらく続いたら、若いもんは、ちいと飽きるかもな。わしにやいっつもウマイがな。...うーん、じゃ、ひとつ、まさるに、金星印工場パンの秘密おしえてやろ。秘密を知ってるとな、パンの味もひと味ちがってくるもんだ。」

」

「秘密？工場に秘密なんてあるの？」

「あるぞー。大体、こんな小さな町の、ちっぽけな工場のパンが、何でこんなにうまくて、有名で人気あるのか、ちょっと不思議っちゃ不思議じゃないかい？」

ばあちゃんは、ちょっと空の向こうを見るみたいに目を細めた。

「わしゃ、社長に、あの工場見学させてもらったことがあるんよ。見学するには、招待券が必要だけど、実はわし、一枚、もってるんだ。まさるにやるから、ちっと秘密、見てこい。」

ばあちゃんは、たんすから、古い厚紙の端切れみたいな券を出してきた。

「うん、ありがと。まあ、そのうちにね。」

工場見学ねえ、社会の授業じゃあるまいし。と、ぼんやり考えながら、券をうけると、ズボンのポケットにおしこんだ。

おやつがすんでも、まだ眠い。まさるはまた、ごろんと横になった。すこしうとうとしかけたら、強い風がひとつ、ふいた。

すごく強い風だった。だって、まさるをぐうんと持ち上げて、そのまま窓の外にぶわりとぶっとばしたんだ。

「うわあっ」

まさるは、たちまち空高く舞いあげられた。

落っこちたら、えらいこっちゃ。風の中で、夢中で、手にふれた柔らかいものにしがみついたら、それはむくむくした夏の雲。

理科の先生は、雲は水蒸気だって言ってたけど、何だ、やっぱり、ちゃんとふっくらふくらんだふとんみたいじゃないか。それに、なんだかお日さまでこんがり焼けた、甘いレモン味のパンの匂いがする。

まさるは、どうにか、その雲の上に、よじのぼると、一息ついた。

これは何だか、ふわふわのパンの上ののっかって空を飛んでるみたいな感じだ。

...そういえば、何だかまだ腹へってきちゃったな。まあ、もし水蒸気だっていうなら、モトは水だから、毒じゃないよね、と、まさるは、雲のはしっこをちょっとちぎって、そっと口に入れてみた。

「うわ、んまーい！」

ふわんと甘くて、すうっととけるようなレモンの香りと、香ばしい太陽のようにしっかり温かい焼き立てパンの味。口の中で、香ばしさと光の踊るようなパン。もうひとくち、もうひとくち。もう夢中になってかじりついた。おなかの中から、気持ちのよい甘いぬくもりと、すうっと輝く透明なエネルギーが満ちてくるような、不思議な感触。

ところが、あんまり食べすぎた。いっぱい食べたから、当然、雲は大分小さくなった。それで、小さくなったら、浮かぶ力も弱くなったんだ。だんだん、足元が頼りない感じに、すうすうしてきて、そのうち、ずんずんと沈みだした。

ひゃあ、しまったなあ、と、かなり頼りなくなった雲にしがみついて、下を見下ろすと、パン工場の真上だった。まさるの住んでるマンションも、小さく白く光って見えた。

まあ、このまますると工場の屋根に着陸して、歩いて帰りゃ、いいよな。と、のんびり考えた。どうも、われながら、あんまりのんびりした気持ちだなあとと思ったら、さっきから、のんびり陽気な音楽が聞こえてるせいだ。

ぐんぐん近づいてくる、工場の煙突から聞こえてくるので、気が付いたんだ。さっきから、ずうっと、のんのんののん、古いパイプオルガンみたいな音。こうやって上から聞いていると、オルガンに合わせて、小さな歌声まで聞こえてくる。真夏の昼下がりに、ミツバチがダンスしながらハミングしてるみたいな、大勢の、かすかな歌声。

「のんのんのん、ふんわりふっくり、のんのんののん♪ パンが焼けるよ、のんののん。ハチミツ色だよ、のんののん。桜あんぱん、クリームぱん、メロンぱんに、レモンぱん。ふんわりさっくり、のんののん。皮は かつしり、のんののん。バターロールに、フランスぱん、ライ麦ぱんに、げんこつぱん、のんのんのんのんののんののん。」

ソラマメみたいなかたち、色とりどりの音符は、パンの歌を歌いながら、とびはねる。雲とじゃれながら、お日さまに照らされ、雲の中に溶けてゆく。そうして、そこから、ふわんふわんと、いい匂い。

そうか、この雲のいい匂いは、パン工場の歌のせいかな。

何となくうっとりとしているうちにも、しがみついた雲はゆるゆると落っこちてゆく。工場の煙突が、どんどん大きく近くなってきて、ついにまさるは、ちょうど、その煙突の中にすんと落っこちた。

その衝撃で、ついに、ざぶとんくらいにちぎれてしまった雲が、けれども、けなげにおしりを支えていてくれた。まさるは、ざぶとん雲に乗って、ふんわりと、煙突の中をおちていくことができた。

ほの暗い煙突の内部は、パンの香ばしい香りでいっぱい。そして、きらきらと光る星のようなツブツブが、落ちてゆくまさと逆流してのぼってゆく。パンたちの歌う歌が、音符になって、いろとりどりのこんぺいとうのように、まさるをくすぐりながら、のぼっていくところなのだ。

いきなり、ぽかりと視界がひらけた。落っこちきったのだ。

ふわ、まぶしい。まさるは目をぱちぱちさせた。

陽気なリズムの歌は、大きなかまどの中で、ふっくりふんわり焼けてゆく、パンたちの歌う歌だった。アツアツに焼きあがった焼きたてパンたちも、ベルトコンベアにのっかって、どんどん流れながら歌い続けている。煙突には、煙じゃなくて、焼きたての香ばしい香りと、歌の音符のツブツブが流れていた。

遊園地のような、と、まさるは目をみはった。ああ、やっぱり、ここはただのパン工場じゃあないんだあ。

たのしそうな歌声、音楽、快いリズム、工場の機械は、リズムカルなダンスをするみたいに、ごおんごおんとゆれていた。ジェットコースターのレールのように、ベルトコンベアが空中までくると張りめぐらされ、軽やかにまわっている。それはまるで、手品師がふりまいた、色とりどりのリボンのよう。

大きな真珠色のタンクで、ごおんごおんと練られたパンのモトが、ホースの先から、ぷちんぷちんとベルトコンベアの上に落とされる。

迷路のようにたくさんのベルトの通路は、パンの種類別にきちんと別れて流れていく。行く先々では、ふんわりまあるく転がされるもの、四角く伸ばされるもの、ドーナツみたいに花形にしぼり出されるもの。

りんごを乗せられたり、タマゴを塗りつけられたり、ジャムやクリームを差し込まれたり。そうして、生れ落ちた瞬間に、それぞれのタネはみな、嬉しそうに歌いだすのだ。

おおきなまどからでてきたパンたちは、より一層嬉しそうにふくらんで、幸せでたまらないみたいにベルトの上を、ころころと踊っている。歌はみんな、豆粒みたいなツブツブの音符になって、弾みながら、笑いながら、煙突へと流れていく。

まさるは、ディズニーランドや、アニメーション映画みたいな風景に、しばらくうっとりともとれていて。しかし、どうにもあんまり不思議すぎる。まず、機械を動かしている人がひとりも見当たらないのだ。

「働いている人は、誰もいないのかな。」

つぶやくと、足元でくすくす笑う声がした。

「いるぞいるぞ、おらたちこんなに大勢で働いてるぞ。」

びっくりして足元を見おろすと、でたあ！

「わあっ！ 小人だあっ！」

いつの間にか、まさるの足元には、親指ほどの背の高さの小人たちがわらわらと集まってきていた。

「そんなに驚くのは、失礼じゃ。」

とはいっても、それほど腹を立てた様子もなく、小人たちは、するすると近くのパン棚によじのぼり、まさるの目の高さのところまでやってきた。お決まりのとんがり帽子、絵本の中からでてきたような、ころころしたスタイルだ。ひげのおじさんみたいなものもいれば、ふっくらしたおばさん、それに、まだ子供みたいな小人もいた。みんな、きらきら光る黒い小さな目で、親切そうな顔だった。

「工場に、お客さんは、久しぶりだじゃ。工場見学のお客さんだな。パンの袋にはいった、工場見学券が当たった人だな。」

「いや、その、そうじゃないんだけど...。」

「このパンは、おらたちがつくつとるじゃ。な、とびきりうまいだろ？ そうそう、招待券、もってたら、出してくりよ。拝見するじゃ。」

ああ、そうだ、ばあちゃんのくれた券。だけど、あれ、随分古そうだったなあ。大丈夫かなあ。少し心配になって、どきどきしながら、ズボンのポケットを探ると、券と一緒に、さっきの雲のかけらが、飛び出した。

ざぶとん程の大きさだったのが、どういう加減か、ぎゅうと縮んで、ポケットに入りこんでいたらしい。はちみつ色に輝く雲は、たちまちむくむくと、綿菓子ほどにふくらんだ。

「あつ。ごめんよ。ええっと、券はこっち...。」

あわてて雲を押し込んで、券を差し出すと、小人たちは、みな、そっちには目もくれず、口をぽかんとあけて、呆然とポケットのあたりを眺めている。

次の瞬間、わあっという嬉しそうな歓声が上がり、工場中が、蜂の巣をつついたように、ぶんぶんという大騒ぎにつまれた。

「わあ、雲のかけらだ、光ミツバチの、ハチミツだ！」

こびとたちは、みな、つぶつぶ黒アメみたいな瞳を輝かせ、手をたたき、足を振り回し、陽気なダンスまではじめた。うきうきしたリズムを受け、パンも、みな、一斉にとびはね、金色に輝いて、歌いだす。

「おてんとさんから、降る降る蜂蜜、ミツバチ踊るよ、ふわふわはちみつ、花からのぼって、雲にしみこむ、おひさま金に滴るよ、雲のパンは、蜂蜜パン、のんのんののん、のんののん♪」

まさるの持っていた雲のかけらは、どうやら小人にとって、大変なものらしい。

親玉風の少し大きめの小人が、ずいっと一歩踏み出した。そして、ちょっとまさるの顔色をうかがうようにして、丁寧に腰をかがめて、こう言った。

「ちいせえダンナ、あの、そのう、モノは相談ですがねえ。...ああ、券はもういいですよ。その雲もってるお方ってことは、特別ご招待券をお持ちになってたって、わかってるす。ダンナにや、とびっきりいっぱい遊んでもらって、おいしいオミヤゲも、たっぷりおつけしやすよ。...あのう、だから、ってんじゃないけど、お腰のぼっけっとからちよいとのおいでてる、その素敵な金色のものを、わしらに、ちよいと分けてくださらないですかねえ...。いや、そりゃあ、ちいせえダンナがお持ちになってても、もう何の役にもたちやしないもんですから。」

こほんこほんとうざらしい咳払いなんかして、なんだか調子がいいヤツだ。くすくす笑いそうになるのをこらえて、しかめつらを作り、まさるは答えた。

「うん。そりゃかまわないさ。もうどうせコイツじゃあ飛べそうにないしね。」

ぴかっと小人の顔が輝いた。

「だけど、何にも教えてくれないでさ、ただ、くれって言たって、そりゃフェアじゃないな。」

小人は、困ったような正直な顔をして、あめ玉みたいな瞳をふせた。

「ちいせえダンナ、そりゃあ、わしらにできる限りのことはさせていただきやすよ、でも...。その、わしらあ、お前さんがたと違うところに、違う風に生きてる もんだから、おめさんがたの喜ぶようなお宝は、もってないんでやす。...その、お金だの、コンピュータゲームだのは...。」

「そうじゃないよ。もともと偶然拾ったようなもんだしさ。...ただ、この雲、びっくりするほど、おいしい雲だったんだよ。ね、どうしてか、知ってるんだろ？普通の雲じゃないんだろ？キミたち、これをどうして欲しがりたい？何に使うのか、教えてくれるんだったら、全部あげるよ。」

宝物なんか要らないって言ったら、喜んで、すぐに教えてくれると思ったのに、どうも、そううまくはいかないようだ。一瞬、にっこり喜びかけた小人が、すぐに、困ったような、複雑な表情を浮かべたのだ。つやつやの黒い瞳が、かなしそうにくもった。

「...ダンナ、そりゃあ、酷ってもんだ。そりゃ、わしらの大切な秘密なんです。」

「ふーん、それじゃ、知らない。ぼく、これ、ばあちゃんにもって帰る。」

「待ってくりよ、ダンナ、ちょっと待ってくりよ。」

小人は、大慌てだ。ちょっと心痛んだけど、やっぱり、みんな秘密なんて、ひどいよな。そう思って、まさるはつんとして言った。

「じゃあ、どうなんだい。教えてくれるの？この雲、一体何なんだい？パンと関係あるのかい？」

「...仕方ねえ、ちいせえのに、ニンゲンのダンナにゃ、やっぱりかなわねえや。みいんな、何でも知りたがるんだから。...でも、ちいせえダンナ、約束だ、こりゃ、秘密だすよ。きっと、大きいダンナたちが知ったら、わしらの大切を、みんなしてとってっちゃう。」

あんまり困った様子の小人に、自分がひどくいじわるな悪人みたいな気がしてきた。まさるは、あわててポケットから、柔らかい金色のふわふわを引っ張り出して、それを全部さしだした。

「うん。約束する。ホラ、この雲これで全部だ。」

ぎゅっと縮こまっていた雲のかたまりは、引っ張り出したとたん、むくむくとふくらみ、柔らかい、美しい金の光に輝いた。あたりが、ほんのりと明るむ。

小人たちはみな、愛しいものをみるように、うっとりとしてそれを見つめた。

「ああ、久しぶりだ、こんな立派な光はちみつ。...約束だ、少し長くなるが、おらたちの大切、おめさんに話す。...あんな、こりゃあ、特別の、光のはちみつなんだ。」

「はちみつだって？だって、はちみつっていうのは、ミツバチが花の蜜をあつめたもんだろ？これは、入道雲みたいに、ふわふわ空に浮かんでたんだよ。」

「ウン、こりゃ、普通のミツバチとは、ちょっと違う光ミツバチのミツだ。光ミツバチは、普通の蜂と同じように、花の蜜を集めるがな、そのとき、花の中に たっぷりためこまれた、お日さまの光エネルギーを、純粋に取り出して、ミツに変えることができるトクベツの蜂だじゃ。花が、タネから育ってくる間、ずうっと浴びてきた、透明な水と光、大地の記憶。その歓びのエッセンスとりだした、とびきりの魔法ミツだ。透き通った光から、ふわふわの雲のかたちまで、伸び縮みも、自由自在。どうなったって、エネルギー値は変わらない。ふわり甘くって、お日さま色に光るんだ。」

次々と、周囲の小人たちが争うようにして、話し出した。何だ、やっぱり、話したくてしょうがなかったんじゃないか

「...そうだ、おらたちモノ作り小人と、光ミツバチは、昔から仲良しでな、お日さまの恵みだの、おいしいのは嬉しいだの、ありがたいだの、そういう、世界のココロ・エネルギーの、タマシイんとこ、ハチがミツにしてな、そいで、それおらたちがもらってな、ウン。そいで、ヒトがモノつくるとき、受け取るときに、両方の心に、ふくふくした甘い気持ちが広がるように、おらたちが、モノつくるところで、こっそりモノの中に、こめとったじゃ。」

「昔は、おら達の仲間は、人間と一緒に生きてきた。もっとも、前は、工場なんかじゃなくて、みんな、家に住んどった。お互い、助け合って暮らしてた。夜中に靴屋の靴なおしも手伝った有名な話なんかも、ありゃ、おらたち職人小人のことだ。」

(この小人は、少し誇らしそうな顔になった。)

「おらたちは、そういう手仕事得意な種族でな。世話になってるお礼に、優しいおかみさんが途中で居眠りしちゃった夜なべ仕事なんか、ちょっちょっとお手伝いなんてしてたもんだ。向こうだって、ちゃんとわかってな、窓辺にミルクおいてくれたり、菓子の端切れ、わざわざとってくれたり、そりゃ気使ってくれたもんだ。...けどなあ、いつの頃からか、人間たち、おらたちのこと、まるごと忘れてきてしまっただけでな、素敵な手仕事なんかもしなくなっちゃっ

てな、だんだん、居場所も手伝う仕事も、なーんにもなくなってきちゃったんだ。...何にもできない職人小人は、だんだん、工場に流れていった。家小人から、工場小人になったってわけだ。」

「おらたちの手伝う工場の製品はな、どれも飛び切り上等だった。昔の工場主たちは、ちゃんと知っててな、機械の中枢や、動力の芯のところに、おらたちへの贈り物や、志やなんか、気を配ってくれたもんだ。なのに、最近は、ご時勢でな、コンピューターなんかでしゃばってきた。コウリツ、ウリアゲ、モウケってな、よくわかんない数字と呪文ばかりでな。もうダメだ。自然からもらったタマシイのエネルギーを、モノの形にして、みんなで分け与えあって喜ぶ、そんな、簡単なエネルギーの流れ、モノのタマシイところを、みいんな、わすれっちまったんだ。おらたちや、タマシイところに住んでる小人だから、だんだん、もう、居場所がなくなっちまった。そいでな、そいだら、光ミツバチだって、おらたちと一緒にだ。ぴかぴかハチミツパワーで、世界じゅうの人間たちの心がかがやくようじゃなっきゃ、ハチたちも、生き延びらんねのよ。」

小人たちは、みんな、涙ぐんで、小さな目をちばちばさせた。

「ここは、数えるほど残った、最後の工場のひとつだ。光ハチミツも、もう今日び、貴重品だ。ほんにいいモノつくるための魔法力、命の歓びを作り出す力、透き通った水みたいな喜びだの感謝だのでぴかぴかのいい品ときゃ、もう、滅多にありゃしね。もう、あと少しでなくなっちまうって、この工場もおしめえかって、心配だったんだ。」



「...ちいせえダンナ、あんたのそのハチミツは、極上品だ。まちげえねえ。なんでだか、知らねえけど、人間の中では、だんなみてえに、ちいせえ人の心の中に、大きいダンナたちが、なくしまったカノウセイやユメの、昔ながらの喜びの呪文が、たくさんこめられててな、極上の光ミツバチの栄養になるらしいだ。それが、うまいこと、この工場にやってきてくれた。...わしら、まだしばらく、元気で、いいばん、つくれるだ。」

小人たちは、みんなとっても陽気で、気持ちのいいやつらだった。まさるは、工場のあちこちを見せてもらい、出来立てのクリームをなめたり、歌うパンの音符をつかまえて、一緒にふわふわ踊って遊ぶ、特別の技術なんか、教えてもらった。小人ステップは、飛び切り楽しい魔法の踊り。いくら踊っても、疲れず、手足が透き通るみたいに、ゆかいな気持ちだった。

光ハチミツの光を、機械に流し込むところも、特別に見せてもらった。工場全体が、きゅるきゅると虹色の喜びに輝くようなシーンは、まさるの心のふかいところにしみこんでゆくように美しかった。知らぬ間に、ほとほと涙がながれていた。もし、すべてが夢であったとしても、きっと、この喜びに輝いた空間のことは、一生忘れない。

それは、広くて深くて夕焼け空みて、懐かしいような、泣きたくなるような気持ちと少し似ていた。悲しくって痛くってくやしいんじゃないくて、大きくて、嬉しくって単純できれいなものを感じても、人は泣くことがあるんだな、とまさるは思った。

「ちいせえダンナ、おなごりおいしいが、そろそろダンナはお帰りにならんにゃ。」

だから、こう言われたとき、まさるはちょっとさびしかった。でも、もう十分幸せだという気もした。袋にいっぱい、ほんのり輝く出来立てパンをおみやげにもらって、心の中のお日さまの光が、いつまでも暖かいような気持ちだった。

ところが、どうやって家に戻ったのか、そこんどこ、どうも記憶があいまいなのだ。

「ばあちゃん、ばあちゃん、ぼく、あの工場のパン、やっぱり大好きだ。これから、毎朝毎日毎おやつだっていいよう。ほら、オミヤゲもらったよ。」

「...何ぶつぶつ寝言いってんの、まさる。ばあちゃんは、さっき友達のとこに出かけてったわよ。」

ぱちっと目を開けると、夕暮れの空が見えた。かあちゃんが帰ってきて、台所でとんとんと包丁を使っていた。

「あ、かあちゃん。」

その瞬間、全部夢だって、どっかで思ってたさ、とまさるの心はすうっと冷たいような気持ちで、そう思った。

...だけど、母ちゃんは続けてこう言ったんだ。

「まさるが目さましたら、お土産パンはちゃんとあずかっているから、明日みんなで食べようって言っとけだ。なあに？パンって。ばあちゃんたら、何にも教えてくれないで、嬉しそうにでてっちゃったのよ。今夜は遅くなるって。まったく、いつまでも元気バアバよねー。母さんも。」

ああ、ウソじゃない。夢じゃない。

まさるの胸は、うれしくてことごととなった。そうだ、ばあちゃんも、工場見学したっていったもん。社長と友達だっていったもん。明日、小人のこと、秘密のこと、山ほどいろんな話を聞くことができるんだ。

「なあにー、まさる、にやにやして、やあねえ。母さんにも教えなさい。」

「秘密、秘密。子供にも、秘密くらいなきゃね。...母さん、明日のおやつもお弁当も、ばあちゃんとぼくのもらってきたとびっきりのパンだよ。」

テーブルの上には、レタス・サラダとレモン水。

夕食は、どうやらパンじゃなくて、母さん特製のカレーライスだな。

## 工場ドリーム

<http://p.booklog.jp/book/44218>

著者 : yamamomon

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/yamamomon/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/44218>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/44218>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社paperboy&co.